

國學院大學学術情報リポジトリ

『春遊機嫌話』序文をめぐって：
『金々先生栄花夢』との関わり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 正明, Nakamura, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000706

『春遊機嫌話』序文をめぐって

— 『金々先生栄花夢』との関わり —

中村正明

はじめに

恋川春町の『金々先生栄花夢』（安永四年刊）は、黄表紙の第一作として文学史上にその名を刻み、現代に至るまで広く人びとに知られている。

ところが、『金々先生栄花夢』が刊行された安永四年に春町によって書かれた『春遊機嫌話』は、同じ黄表紙装丁の作品であるにもかかわらず、あまり知られず語られることも少ない。その最大の理由は、金々先生のごとき斬新な趣向によって成る

通人向け草双紙ではなく、単に草双紙の装丁を纏った斬本であつたからにほかならない。所謂、黄表紙仕立斬本であり、初期草双紙の流れを継いで作られる一般的な物語性のある黄表紙とは異なる作品とされたからであろう。

『春遊機嫌話』は、安永四年に『金々先生栄花夢』と同じ板元鱗形屋孫兵衛から二巻二冊で刊行された。全十丁のうちに、春町自身による序文（上ノ一オ）、鱗形屋による跋文（下ノ五ウ）とともに、全十話の小噺が収められている。半丁あるいは見開き一丁に一話が配され、内容に合わせた挿絵が全話に描かれている。その小噺は、後にも触れるが、江戸庶民の正月の歳事に

まつわるモチーフが主となっており、正月の暢気な風に満ちた楽しい小噺絵本となっている。

本作は『噺本大系』第十七巻に影印と翻刻ともに収録されており、解題も備わっている。その解題では、書誌事項と書名について略述した後、作者かつ画工である恋川春町の紹介、作品の形式(黄表紙仕立噺本)の指摘、板元の紹介が順に綴られているが、小噺の内容には触れられていない。作品研究という意味では、いまだ本格的なもの、十全な解説・解題を見かけたことはない。

さて、小噺本文は措くとして、序文・跋文は本作刊行の背景を垣間見せるものとして非常に興味深いものがある。殊に新戯作者春町の弁である序文は、特に注目すべきであろう。以下に、その序文(上ノ一オ)を掲げることにする。

序

それ詩歌に六義あり所謂風賦比興雅頌これなり落し咄にまた是あり昔々牝化物牝馬鹿婢牝行過牝仕形牝下懸牝いわゆるこのたぐひなり近世家くにあらわす所の咄し本まことに梁に満ち牛を汗するといへとも偶く一二片の絵入にして曾て児童の眼を歛しかつ耳をおどろかすにいたらすよつて此春のなくさみと此一冊を頓考の頓写と書かけぬこ

ひ願くハ四方の令子しまひハ坐右腰張にと爾云

画工

恋川春町「印」

漢文訓読調の文体は、同年の『金々先生栄花夢』序文に相通じるものがある。その内容は、大きく前半、後半の二つに分かれている。前半は落し咄の六義について、後半は近年流行りの噺本への言及とそれに応じて本作を執筆したとする創作の契機が綴られているのである。

本稿は、それら序文に記された二要素のうち、後半部に注目して深く掘り下げ、『春遊機嫌話』の持つ文学史的意義を考えたいものである。前半部、落し咄の六義については、別稿『春遊機嫌話』序文をめぐって―「落し咄の六義」の考察―(『澁谷近世 國學院大學近世文学会会報』第二十八号・令和四年三月三十一日)を参照していただきたい。

一、『春遊機嫌話』と『金々先生栄花夢』刊行の先後

まず、『春遊機嫌話』と同じ安永四年に刊行された『金々先生栄花夢』との関係性について考察を試みたい。

従来、両作品の関係については、その刊行の先後に注目が集

まっていた。『金々先生』は、長らく黄表紙の最初作としての評価が文学史的に定着してきており、同年刊行の『春遊』は同時に刊行されたものか、あるいは時期を異にした刊行なのかという点で説が分かれてきた。言い方を変えると、黄表紙の創始作としての『金々先生』の位置付けは動かないものとして認識したうえで、『春遊』の位置付けをどう据えるか議論されてきたのである。

古くは、浜田義一郎が「恋川春町——倉橋家文書および二三の考察」^②において、「この本は末年正月新版目録に載っていないから、金々先生の好評により作られたかと想像される。」と述べている。これは『金々先生』が草双紙慣例の正月刊行であるという前提があり、そこから『春遊』が正月よりも後時の刊行であると述べるものである。

この浜田説を承けて、宮永啓子は「恋川春町の黄表紙に於ける書誌学上の問題」^③の中で次の指摘を行っている。

確かに「春遊機嫌」は金々先生栄花夢最終丁の鱗形屋「未正月^{版新}目録」にも出ていないし、又その目録中の諸作品とは異った絵題簽を有していて、一見、正月出版ではなく金々先生より後に作られたもののようにみえなくもない。けれども「春遊機嫌」の絵題簽をみるに、それは「豊年俵百

漸」等と同じく安永四年鱗形屋版の咄本の一類に共通した意匠図案のものであり（中略）黄表紙の体裁で出した咄本である故に、純粹の黄表紙の新版目録には入れられなかったのであり、絵題簽も違えたものと思われるのである。

これは「春遊」の絵題簽に注目したものであり、水野稔論^④を引きつつ『春遊』の正月刊行の可能性を提示している。その結論として「：春遊機嫌が安永四年の正月に金々先生と同時に出されたもの」と述べている。

さて、その後浜田は再び『金々先生』の刊行時期について記している（『金々先生栄花夢』出版の時期^⑤）。ここでは、国会本『平日閑話』安永五年正月記事の南畝自身による欄外書き込み「去年夏か秋の頃絵草紙二冊出る。金々先生栄花夢と云名也。此絵草紙より風を^⑥変ず。」を引き、以前の自説を退けて、正月刊行ではない旨を示して見せたのである。

浜田が述べた、この『金々先生』夏・秋刊行説を改めて裏付けるに、『金々先生』巻末に附された「未正月^{版新}目録」（十ウ）に注目したい（図版A）。当該目録には、鱗形屋孫兵衛が安永四年正月に刊行された草双紙の書目が十三種並べられている。その中に『金々先生』も収められていることが正月刊行説の有力な根拠となっている。

場合も多いので、そうした折に目録が失われた可能性もあるが、原装と思しき本（大東急本『金紙屑』など）にも目録は見られない。その一方で、『金々先生』の現存諸本には多く目録が残存している（国会、国文研、加賀文庫本など）。こうした事実は『金々先生』とそれ以外の清満・清経画作品群との間に、何らかの差異、もしくは別事情が存していたことを表わしてはいないだろうか。

それが、刊行時期の違いである。つまり、『金々先生』以外の作品群は草双紙慣例の正月刊行であり、その時点では目録が附いていなかったということである。時を隔てて夏・秋頃に刊行された『金々先生』には、正月刊行分の諸作のタイトルも含めて目録中にまとめたというわけである。そう考えると、目録中に清満・清経画作が居並ぶ中に一作だけ春町作がある違和感や右下部の絵師名に春町の名が欠けている理由も判明するだろう。『金々先生』がイレギュラーに刊行された作品だからであり、鱗形屋の草双紙を担う主要な絵師とするには時機尚早な新人戯作者であるためなのである。

これは決して数の多くない現存諸本における新版目録の不在という様相を鑑みただけの状況証拠的な推測であるが、ひとまず『金々先生』の夏・秋刊行説を補強するものとして提示して

おく。

ここで、改めて『春遊機嫌話』に立ち戻ってみると、外題中に「春遊」という正月を表わす言葉が入っていること、収録された全十話のうち七話（宝船・大黒・立うす・物おほへ・試毫・萬歳・はつ湯）が正月の庶民の年中行事をモチーフとした小噺であることなどを考えれば、本作が正月刊行を意図した出版物であることは明白ではないだろうか。また、春町の序文に「此こ春はるのなくさみと此一冊を頓考ずいあんじの頓写ずいがきと書かけぬ」（上ノ一オ）とあり、巻末の鱗形屋口上に「安永四歳 未正月」（下ノ五ウ）と記していることを素直に受け入れるべきである。

つまり、安永四年正月『春遊機嫌話』刊行、同年夏・秋頃『金々先生栄花夢』刊行とするのが妥当と考える次第である。

二、『春遊機嫌話』の文学史的位置付け

それでは、『春遊機嫌話』をどのように文学史上に位置付けていけばよいだろうか。

『金々先生』に先行する刊行であることから、黄表紙の最初作として差し替えてしまふのはいささか早計である。『金々先生』の最初作たる所以は、南畝の「大人のものになつたるもお

かし」(『菊寿草』序文)⁷⁾の言を俟つまでもなく、その内容(作品の素材や趣向)の変容にあるからである。『春遊』は一読するまでもなく判る通り、絵入り小喃本にほかならない。

『春遊』の文学史的位置付けは、すでに武藤禎夫が『喃本大系』⁸⁾解題において、「本書は鱗形屋・春町のコンビで、従来の絵本形式の喃本とは異なる黄表紙仕立喃本の創始となった画期的な一書」と明記している。従来の絵本形式の喃本“というのは、近世前期に上方で出版されていた絵本形式の軽口本のみならず、文中の語句を絵で表現する遊び絵的な仕形喃本のような文主画従の版本をもう。一般的な喃本は文章中心の小本で、その中に挿絵が数葉挟まるものが主であった。例えば、安永期喃本の先鞭をつけた『鹿の子餅』(明和九年刊)には口絵一、挿絵四の計五図を載せるばかりである。『聞上手』(安永二年刊)には挿絵四図、『聞上手 二篇』(安永二年刊)も挿絵四図といった具合で、その他の喃本類も同様である。当時流行していた、所謂安永期喃本において、他の類書と差別化を図って作られたのが『春遊』であった。それは安永期小喃出版に先鞭をつけた鱗形屋孫兵衛の新規な工夫であったろう。そういう意味で、黄表紙仕立の喃本という新形態は、作者の春町も板元の鱗形屋もかなり自覚的であったはずである。

春町は序文に次のように記している。

近世家^{このういへ}にあらわす所の咄^{はな}し本まことに梁^{はな}に満ち牛^みを汗^{あせ}するといへとも偶^{なま}く一二片の絵入^{えいれ}にして曾^{まづ}て児童^{わらわ}の眼^めを歛^{よこさ}しかつ耳^{みみ}をおどろかすにいたらすよつて此春^{このはる}のなくさみと此一冊を頓考^{ずいあんし}の頓写^{とんがき}と書かけぬ(上ノ一オ)

近年流行の喃本は挿絵が数葉ばかりで幼い読者たちの目を楽しませるものがなかったので、本作を書いた(描いた)というのである。新奇な画文提携の喃本を提供するという宣言と捉えてよいだろう。また、跋文の鱗形屋口上は、まさに黄表紙仕立喃本の宣伝予告となっていることは言うまでもない。

年々歳々花あひ似たる趣向いとふるめかしくこゝに歳々年々人同しからぬ恋川春町の筆をかりて春雨の御なくさみこそなへ侍りぬなをおひく出版いたすべく候

安永四歳

未正月

板元

鱗形屋「印」(下ノ五ウ)

これまで、右の跋文は、草双紙の史的展開という視点から鱗形屋による新進黄表紙作者春町の紹介口上として捉えられることが多く見られた。⁹⁾しかし、春町の序文と対応して考えれば、喃本からの視点と見るべきであろう。「年々歳々花あひ似たる

安永四年『春遊機嫌話』

安永五年	〔頓作万八噺〕	鳥居清経画	鱗形屋孫兵衛
	〔夜明茶吞噺〕	鳥居清経画	鱗形屋孫兵衛
	〔書集津盛噺〕	鳥居清経画	鱗形屋孫兵衛
	〔初笑福徳噺〕	鳥居清経画	鱗形屋孫兵衛
	〔新作噺初噺〕	富川吟雪画	鶴屋喜右衛門
	〔おとしはなし〕	鳥居清経画	板元不明
安永六年	〔友たちはなし〕	鳥居清経画	伊勢屋治助
	〔はなし〕	鳥居清経画	板元不明
	〔雨夜友〕	画工不明	西村与八
	〔新買言葉〕	鳥居清経画	西村与八
安永七年	〔新版〕梅笑顔	画工不明	岩戸屋源八
	〔はなしたりく水と魚〕	鳥居清経画	村田次郎兵衛
	〔新作当世噺〕	画工不明	板元不明
	〔新〕坂福木樽	画工不明	板元不明
安永八年	〔おとし〕宝舟	画工不明	葛屋重三郎
	〔おとし〕豊年口	画工不明	村田次郎兵衛
	〔新〕作はつゑがは	画工不明	西村与八
安永九年	〔新〕可喜種	画工不明	村田次郎兵衛

『口合はなし目貫』 画工不明 葛屋重三郎
『舛落はなし子』 (『青楼吉原咄』 一部再板本)

『落咄福笑』 北尾重政画 (『外題鑑』に

拠る)

この一覧を眺ると、黄表紙仕立の癖本という新奇な工夫は、やはり鱗形屋孫兵衛と春町のアイデアから始まり、少しずつ他の板元へと広がっていったことが判明する。春町には本作以降に後継作はないが、鱗形屋をはじめとして、伊勢屋治助や村田次郎兵衛、葛屋重三郎、岩戸屋源八など黄表紙の代表的な板元の多くが黄表紙仕立癖本を出版していったことが確認できるのであろう。春町は、黄表紙の創始者のみならず、黄表紙仕立癖本の創始者でもあったのである。

三、『金々先生栄花夢』を生み出す契機としての

『春遊機嫌話』

(1) 鱗形屋孫兵衛の目算

改めて『春遊機嫌話』と『金々先生栄花夢』の関係性に立ちかえって考察を進めていきたい。安永四年正月『春遊機嫌話』、

夏・秋頃『金々先生栄花夢』という刊行順を踏まえると、何を指摘し得るであろうか。

『金々先生栄花夢』はここで贅言を尽くすまでもないが、それまでの草双紙の風を一変させた画期の作として文学史上に名を刻む黄表紙の最初の作品である。

黒本・青本期の草双紙は歌舞伎狂言や和漢の古典文学作品のダイジェストを主として展開しており、明和末～安永初期になると、周知の物語に独自の趣向を導入した作品が次第に増加する傾向にあった。それらは若年層から大人の読者に至るまで、男女を問わぬ広範な読者層によって受容されていた。

『金々先生』は、既存の草双紙同様、中国の古典文学『枕中記』およびその中世日本における享受作である謡曲『邯鄲』を下敷きにして作られている。ベースとなる世界のアレンジを行うという創作方法は従来の草双紙のゆき方そのままといい。例えば、『邯鄲』を世界に採った初期草双紙というと、富川吟雪画『浮世栄花枕』(安永元年刊)や鳥居清満画『初夢かんたんの枕』(刊年不明)などが挙げられる。

しかし、作者春町はすでに知られた『邯鄲』の物語に、新趣向として洒落本的な遊興の様子を取り込んだのである。安永期、成人男性読者をターゲットにした洒落本は、最盛期ともいうべ

き人気を獲得していた。吉原を中心とした廓遊びに通じた通人戯作者によって書かれる洒落本は、黒本・青本のメインターゲットである幅広い読者層とは一線を画する、かなり限定された読者を保持していたジャンル戯作であった。春町は、戯作的発想から、どちらかというと若年向けの草双紙と、成人男性向けの洒落本を組み合わせて『金々先生』を生み出したわけである。それも、形態としては草双紙そのままを踏襲しつつ、内容的には洒落本の遊興世界を画像化したり古典作品の一節を引用したりと、通人かつ文人であった戯作者仲間にしかり十全に理解しえない、きわめて新鮮な新戯作を誕生させたのであった。

こうした『金々先生』創作の発想法はこれまでも文学史的説明として頻りに指摘されてきたことだが、ほぼ同様のことが『春遊』創作においても言えるのではないか。

明和九年正月刊行の木室卯雲作『鹿の子餅』を端緒に出版が盛行に向かった斬本は、安永二年正月小松屋百亀作『聞上手』によって定着したことは、南畝が『奴師勞之』(文政四年成立)に「…小本に書きしは卯雲の鹿子餅を始めとし、百亀が聞上手といふ本、大いに行はれたり。其後小本おびたゞしく出でしなり」と記していることで明白である。参考までに『日本小説書目年表』⁽⁹⁾に拠って、この時期の斬本の出版点数を確認すると、

『鹿の子餅』が出版された明和九(安永元)年には三点であったものが、翌安永二年には二十一点に急増していることが分かる。斬本に注目が集まり広く人気を獲得したことを端的に表わしている。

こうした斬本の盛行の契機となった『鹿の子餅』の板元は鱗形屋であった。その好評を見て、これを好機と他の板元が即座に後追いついていったのであろう。その急勢に反して、当の鱗形屋は後れを取ってしまう。安永二年の斬本刊行ラッシュの中で、鱗形屋版は、現在判明しているところで長琴子作・文広画の地口本『風流世地口須天宝』だけである。

かかる文運に対処しようと考えた鱗形屋の新工夫が、お得意の草双紙と斬本とを結び付けることであったのではないか。当時、鱗形屋は草双紙の随一ともいえるべき出版点数を誇る地本問屋であった。こうして、新人春町と組んで生み出したのが『春遊機嫌話』であった。もともと、この新工夫もすぐに他の板元により追隨されていくことにはなるのだが。

安永四年当時、流行していた斬本を草双紙の体裁に組み入れてしまうという趣向は、長らく草双紙の板元であった鱗形屋にとって、容易に思いつく発想であらうし、技術的にもさして困難ではなかったに違いない。斬新とは言わないまでも、これ

までに江戸地本にはなかった黄表紙仕立噺本だからこそ、『春遊』跋文の板元口上として「おひ／＼出版いたすべく候」と、継続的な出版の広告宣伝を行ったのである。

新奇な意匠を見せる噺本『春遊機嫌話』について、作品自体の同時代評価は見出し得ないが、爾後追隨作を多く生んでいく事実は、黄表紙仕立という噺本の形式としての可能性を大きく広げる契機となった作品であると認識してよいだろう。

(2) 恋川春町の洒落本的発想

さて、先に春町自身による黄表紙仕立噺本の後継作はないと記したが、おそらく『春遊』刊行直後に、春町ないし鱗形屋は、本作の新しいジャンル横断的な試みと新奇な戯作の形式に着想を得て、連想的な作法で別のアイデアを宿したのではないかと考える。つまり、噺本と草双紙の形式を組み合わせたように、流行している別の地本と草双紙を組み合わせてみるという趣向である。『春遊』が安永四年正月刊行であり、『金々先生』が同年夏から秋にかけて刊行されたとするならば、『金々先生』の執筆は遅くとも春頃には行われていたはずである。通例の正月刊行草双紙類は、晩夏から秋にかけて執筆されることが常であった。戯作者が板元から執筆依頼を受け、それに手を染める

のが秋口だったらしい。その後、板木彫刻、摺り、製本を経て、正月に本屋・草双紙見世の店先に並べられたわけである。その期間は、四、五ヶ月といったところか。際物刊行本など、時と場合により異なるが、年例的な刊行が多かった草双紙は平均四、五ヶ月の製作期間を要したようである。安永四年正月刊行の『春遊』の評判については史料が遺されていないが、その新形態噺本の手応えと意欲を引き継いで、比較的早いうちに『金々先生』創作に取りかかっていたと考えられる。『春遊』の存在が、その直後の黄表紙というジャンル創始に図らずも寄与していたということである。

それでは、具体的には『春遊』の何が『金々先生』に繋がっているのだろうか。

安永期、噺本以上に長期間にわたって人気を継続させてきた戯作に洒落本があったことはすでに記した。『遊子方言』（明和七年頃刊）により会話体の文体を獲得した洒落本は、江戸中期の文人趣味、通人性の醸成の中で広く江戸市民に享受され出版されていた。安永期は、そうした洒落本の爛熟期である。

春町や彼の交友（交遊）関係にある数多の文人たちが洒落本作者としてすでに名を連ねていた。例えば、春町の盟友ともいうべき朋誠堂喜三二（錦金佐恵流）は、当世通人のファッショ

ンブックたる洒落本『当世風俗通』（安永二年刊）を物しているが、その筆耕かつ画工として春町も関わっていることはよく知られている。言わば春町は、遊里における交遊を常とする文人サロンの一人であった。そんな春町にとって、洒落本と草双紙とを結び付ける趣向は決して何もないところからの新発想ではなかったであろう。『春遊』において実作として断本と草双紙の組み合わせに取り組んだからこそその新たな組み合わせが、発展的連想として働いたと考えるのがごく自然であろう。駿河國小島藩江戸詰武士としての春町の遊興的な教養と交遊によって、洒落本的素養を十分に備えていたものといえよう。事実、後年になってから『大通聖寺無頼通説法』（大徳聖寺無頼通説法）（安永八年刊・春早坊杜選和尚名義）という洒落本を執筆もしている。かかる春町の文人趣味を伴う遊興性が、洒落本と草双紙を結び付ける胚胎となつたのである。

（3）恋川春町の洒落本的描写

更に掘り下げて言うならば、『春遊』中にはすでに洒落本的要素が幾つも散見される。それらを具体的に紹介し、検証してみたい。

興味深いことに、本作品中の小断全十話のうち、三話（うた、

ね）「ねわすれ」「はつ湯」は春町オリジナル作ではなく、先行する断本中の小断を改作したものであると、島田大助が指摘している。^①その原作と改作を比較すると、自ずと本作の洒落本的要素が明確に浮かび上がってくるのである。

『春遊』第四話目の小断「うた、ね」（上ノ四ウ・上ノ五オ）は、『聞上手三篇』（安永二年刊）の「やきもち」が原話である。原作と改作それぞれの本文を引く。

やきもち

コレだんな、もふおきさんせとゆりおこせバ、目をあいて、エ、むまい夢を見てゐたに、大事の所をおこしくさつたと、舌打すれバ、ヘソリヤまあ、どんな夢を見なさつた。はなしなさい ヘヲ、上の、やふな所へ行て、それハくどふもいへぬい、女にあふて、うかく跡についていたれば、茶屋の二階へあがつたとおもへ。おれも茶やへよつたれば、其女がおれにはなしをしかけおつた。其時のうれしさ。それから何のかのと、すびきかけて見たれば、その女もがてんしたとおもへ ヘエ、そふしてどふしたヘヘヲ、それからそばへよつて、よいしゆびじやと抱付た所を、ついてまへにおこされた。ア、のこり多イといへバ、ヘエ、ほんに見るおまへもおまへじやが、あつかましい。

そのマア見られた女めが女めじや (『聞上手三篇』)¹⁵⁾

うた、ね

雨おちのきしやごなかまつか／＼とは入てこれていもふほんよみのずいねかおきたまへ／＼とゆすりおこされていしゆあくびましくらエ、いま／＼しいゑ、ゆめを見て居たものヲ へ友立 能ゆめとはどうした へていしゆ マアききやれ北こくへずいいきと出かけたところかきついきまり へ友たち そしておらかてきハどふした へていしゆ のこらずきてきついうらみナぜつれだつて来てくんなんせんとどふぞあしたノはんといつた へそしてどうした へていしゆ そこておれかいふニ口てばかりてハしやうこがねふといつたれハそんなら文をあけんしやうからとゞけてといふところをぬし立かおこした へ友たち エ、おしひことをそんならまたねて文をもつてきてくりやれ (『春遊』)

どちらも遊び仲間の会話が綴られており、寝ていた友人の夢の内容について語られる断となつてゐる。「やきもち」では、男が誘われる女は地女であるが、「うた、ね」では新吉原の遊女が相手に変更されている。その話を聞く仲間たちもみな廓遊びの仲間であることが分かる。最後のオチも変えられているが、

改作の方は遊里での遊興を前提とした話であるだけでなく、会話に織り交ぜられた流行語や通人表現、吉原ことば (北こく、ずひいき、てき、くんなんせんなど) を見ても、洒落本の一節のごとき様相を呈しているのである。

挿絵にも注目してみると、室内で火鉢を囲んで話を交わす三人の男性が描かれている。その脇には炬燵槽に布団が被せられている。冬の景、もしくは正月の景である。柱に掛けられた三味線から、部屋の主 (亭主) は相当な遊び人であろうと推測される。男性たちは通人風の小ざっぱりとした風体で、流行の縞の小袖を羽織っている。彼らの頭上には細く長い鬢が頭に載っており、いかにも当世の息子然とした様子である。『当世風俗通』でいう「上之息子風」である。彼らの姿は、そのまま『金々先生』の金兵衛の外見と同じと言っても過言ではない。

『春遊』第十話目 (最終話) の小断「はつ湯」 (下ノ四ウ・下ノ五オ) は、『談俗』(『口拍子』 (安永二年刊) の「仙人のとりちがへ」が原話であろう。

仙人のとりちがへ

下女、ものほしへ出、ゆぐをひろげる所へ、何やらぐハた／＼と空から落たれば、下女、キヤツといふて二かい飛おりました。へ下男おどろき、おさんどの。どふさしやつた。

「下女 わしハどふもせぬが、ものほしで、わしが白いは
ぎを出してゐたれば、天からたれやら、通をうしなふて落
た」下男 そんなら、たしかに仙人だと、かけ上て見
た所が、大のあら男ゆへ、こハぐながら、はしごの口か
ら、ヤイ、おのれハ何といふ仙人しや。ヘイヤ、おれハ此
やねで昼ねして、ころけて落たやねどろほ（『談口拍子』¹⁶）
はつ湯

うら町のお内義はつ湯ニ出かけるとして八丈のかわりしまニ
金しもん両こくおりのは、ひろをしめかけ内も、まておし
ろいをぬりかけそと八もんじニあるきかけらるれハ通りの
人あれ見やれとほうもねふしろいもの黒田様の上やしきの
よふだとのわる口どもの調市てつちきもをつぶしうろつくひやう
しニ石にけつまずひて内義のすそへばつたり へ内ぎ ふ
りかへつて長まつや今のはなんだ へ長松ヤイわたくし
かけつまずひてころびました へ内ぎ ム、おれハまた
仙人かとおもつた（『春遊』）

嘶のシチュエーションは違うが、女性の脛を見て転げた男を
久米仙人と勘違いするオチは同様である。原作も改作も遊里を
扱っているわけではない。しかし、「はつ湯」はお内儀の艶め
かしい姿態が通行人たちの目を引く話で、彼女の外見がリアル

に説明されていることが分かる。「八丈のかわりしまニ金しも
ん両こくおりのは、ひろをしめかけ……」といった具体的に詳
細な描写であるが、八丈産の変わり縞や金糸紋、幅広帯など当
世流行の衣裳を事細かに綴るやり方は、洒落本と同様である。
これらのうち、「八丈の変わり縞」は『金々先生』にも見える。

『春遊』第九話目の小嘶「ねわすれ」（下ノ三ウ・下ノ四オ）は、
『坐笑産』（安永二年刊）の「朝帰り」が原話である。細部に
差異はあるもののほぼ同じ内容である。「ねわすれ」の方は
“きんく風”の息子¹⁷が、吉原遊びの帰途、日本堤（吉原土手）
を歩む姿が描かれている。

朝帰り

息子遣ひ過し、勘当におよぶ処を、一家のそせうにて、其
分にさしおく。有時、ぢびやうおこり、一夜ばかりハしれ
もせまいと、吉原へ行き、明る日戻りて、我内の首尾をの
ぞき見れば、また一家どもあつまり居る。なむさん、又勘
当の相談で有ふ。まつ、よふすを聞ふと、飯たきを出し、
どふだ、内の首尾ハ。夕部旦那様が頓死被成ました。ヘヲ、
それでおちついた（『後集 坐笑産』¹⁷）

ねわすれ

きんく風の息子¹⁸あそびニゆきねわすれておそくかへる道



〈図版B 『春遊機嫌話』 下ノ三ウ 国会図書館所蔵〉

すからたしかにおやぢかおきて居てけさはたいいていの事ではなひと頭つう八百あんじくらしして土手をかへるむかうから手代かすたく モシ若たんな様どうした事でござりますおやぢ様か大こと へむすこ なんだはらをたつてかへ手代 い、へゆふべから御大びやうてけさこつくりおはてなされました へむすこそれであんど (『春遊』)



〈図版C 『当世風俗通』 十七ウ 国会図書館所蔵〉

帰宅して親父に叱られることを心配しながら帰る道すがら、向うから手代が迎えにやってくるという話であるが、本話で注目したいのはその内容よりも挿絵の方である (図版B)。夜半の日本堤を歩く二人の足元には野良犬が眠りこけており、夜空の雲間には三日月が覗いている。二人の息子はまさに通人めいた風体で、細い鬘、細い脇差が見える。向かって左側の息子は

竹田頭巾（亀屋頭巾）を被った黒づくめの衣裳で、春町が『当世風俗通』の「附録豚輩異体之図」挿絵に描いた「のら者風俗」図（十七ウ）と全く同じものである（図版C）。『当世風俗通』本文には「黒ちり緋の竹田頭」（十六ウ）と記されている。そしてまた、同じ男性像は『金々先生』にも現れてくるのである。



〈図版D 『金々先生栄花夢』五ウ 国会図書館所蔵〉

それは源四郎と万八、五市という取巻き連を連れて日本堤を歩く金兵衛の姿（五ウ）であるが、その外見は『春遊』と完全に一致する（図版D）。その本文には「きん／＼せんせいの出たち八丈八たんの羽おりしまちりめんの小そでやくしや染のはだぎかめやづきに目ばかりいだし……」と綴っている。

ここに図らずも、春町による図像の連鎖、洒落本（『当世風俗通』——黄表紙仕立噺本（『春遊機嫌話』——黄表紙（『金々先生栄花夢』）という繋がりを確認することができるであろう。この象徴的ともいうべき図像の連続性のみをもって積極的な証左にするつもりはないのだが、春町作品の戯作性、通人性において明確なラインが存することは理解できるである。

おわりに

本稿は、『春遊機嫌話』の春町序文に注目して考察を試みたものである。

その内容が契機となつて『春遊』と『金々先生』との関係性が炙りだされてくる点をできる限り詳細に分析、検討してみた。『春遊』は、当時急に盛行を見せた噺本出版に乗じて春町と鱗形屋の工夫により成った黄表紙仕立の噺本であり、その形態は

数多くの追随作を生み出すに至る新奇な作品であった。そして、その成功が、更に当時通人をはじめとした成人男性に盛んに読まれた洒落本の草双紙化である『金々先生』誕生の契機となったことを指摘したわけである。

『金々先生』同様、『春遊』もまた文学史的に注目すべき重要作品といえるだろう。

注

- (1) 武藤禎夫編・東京堂出版・昭和五十四年。ほかにも『近世文芸叢書』第六(国書刊行会・明治四十四年)や『江戸落語集』(博文館・大正六年)に翻字のみ収録されている。
- (2) 『国語と国文学』三十六卷八号(昭和三十四年八月)・後に『江戸文藝攷』(昭和六十二年・岩波書店)に収録。
- (3) 『国文』お茶の水女子大学国語国文学会『第十三号(昭和三十五年二月)』
- (4) 水野稔「黄表紙における刊年と異版の問題」(『国語と国文学』三十五卷七号・昭和三十三年七月)
- (5) 『天文学』「資料と研究」(浜田義一郎編・昭和五十四年・東京堂出版)収録「偶観抄」初出・後に『江戸文藝攷』(昭和六十三年・岩波書店)に収録。
- (6) 『大田南畝全集』第十一卷(浜田義一郎ほか編・昭和六十三年・岩波書店)
- (7) 『大田南畝全集』第七卷(浜田義一郎ほか編・昭和六十一年・岩波書店)
- (8) (1)に同じ。
- (9) (2)と同論文。

- (10) (1)と同書並びに第十八卷(武藤禎夫編・昭和五十四年・東京堂出版)
- (11) 『嘶本大系』第十七・十八卷と棚橋正博著「黄表紙総覧 前編」(昭和六十一年・青雲堂書店)を参考に作成した。

- (12) 『日本随筆大成』二期十四卷所収(平成六年新装版・中央公論社)
- (13) 『近代日本文学大系』25日本小説年表附録「目録」所収(山崎麗編・昭和四年・国民図書)

- (14) 島田大助「安永期黄表紙仕立嘶本考」——鳥居清経本を中心として——(『鯉城往來』第二号・平成十一年十月・広島大学近世文学研究会)

- (15) 『嘶本大系』第九卷収録(武藤禎夫編・昭和五十四年・東京堂出版)
- (16) (15)に同じ。

- (17) (15)に同じ。

*図版掲載を御許可くださいました国立国会図書館に深謝いたします。